

清瀬と結核



結核予防会

顧問 島尾 忠男

清瀬市には郷土博物館という立派な展示施設があり、その友の会が組織され、年に3回講演会を開催している。清瀬になぜある時期あれほど結核療養所が集中してあったのだろうかということが話題になり、複十字病院の尾形前院長が相談を受け、古い時代の清瀬と結核の関係をよく知っているということで、筆者に講演の依頼があった。「清瀬と結核」と題して平成24年10月13日に行った講演内容の要約を紹介する。

サナトリウム療法の始まり

結核は感染症で、明治の開国以降日本では強くまん延し、多くの人が命を失い、恐れられていた感染症であった。化学療法がない時代には、痰を調べると結核菌が見つかるくらい進行した病状になると、亡くなる人も多かったが、中には進行が止まり、菌が陰性になる人が少なからずいたことは、北米にある有名なトルドー療養所に、化学療法が開発される以前に入院した結核患者の遠隔成績や、インドでの観察成績からも明らかである。人の抵抗力と結核菌の毒力との間の微妙なバランスが、サナトリウムでの新鮮な空気、安静、栄養を基本にするサナトリウム療法を可能にしていた。

19世紀に英国で始まり、後半に入ってドイツで発達したサナトリウム療法は、新鮮な空気、栄養という点は共通していたが、当初はある程度の運動を加えていたのを、ドイツのデットワイラーが自らの体験から安静のほうが良いということで、大気・栄養・安静を主軸とするサナトリウム療法として完成させた療法である。スイスのダボスに代表されるように、空気清浄な山岳地帯に多くのサナトリウムが建設された。

日本では医学教育に指導者として来日したドイツの

ベルツ博士が、海浜の温暖な地を推奨したため、湘南や須磨の海浜に療養所が作られていった。明治20(1887)年に設立された鎌倉海浜療病院は、翌年にはホテルに転換したような立派な建物であり、明治22(1889)年に建設された須磨浦療病院が長く使われたサナトリウムとしては日本最初の施設で、その後湘南の南湖院などサナトリウムが次々と建てられていった。これらはいずれも私立で、入院料も高く、庶民の結核患者にとっては高嶺の花であった。

公立結核療養所の建設

庶民の結核患者を収容するために、大正3(1914)年に人口30万人以上の市に、結核療養所を設置し、その建設と運営に補助金を支給する制度が始められ、大正6(1917)年に大阪市立の刀根山病院が、次いで大正9(1920)年には東京の江古田に東京市療養所が開設された。大正8(1919)年に制定された結核予防法では、人口5万人以上の市に結核療養所の設置が命じられ、強くまん延していた結核に対応するために、公立の結核療養所は急速に増えていった。

清瀬の最初の結核療養所は「府立清瀬病院」

大正7(1918)年のインフルエンザ大流行の後一時減少傾向を示した日本の結核は、昭和に入って再び急速に増え始めた。江古田の東京市立療養所だけでは病床が不足し、次に公立の施設として昭和6(1931)年に清瀬市の現在看護大学のあるところに建てられたのが、東京府立清瀬病院である。当時結核は差別、偏見の対象であり、結核療養所の設置に対しては、地元の反対運動が起こっていた。清瀬も例外ではなかったよ

うであるが、昭和大不況の時代で、最後には地主も売却に同意し、府立清瀬病院が建設された。

次々と結核療養所が清瀬に

一旦結核療養所が建設されてしまうと、結核に対する差別・偏見のため、その隣に住もうと思える人はいない。府立清瀬病院が開設された昭和6年は、満州事変が起こった年でもあり、その後満州国の建国、日支事変と戦火は拡大され、**図1**に示したように、その影響を受けて結核も急速に増え続けていた。

清瀬には、当時の武蔵野電鉄（現在の西武池袋線）の線路の南側に、広大な雑木林が残されており、買収交渉がし易いということから、昭和8年の「ベトレヘムの園」と清瀬病院の後保護施設としての府立静和園、昭和11年の東京市職員のための代用病院と結核施設の設立が続き、軍隊での結核増加に対応するために、昭和14年には傷痍軍人東京療養所が建設され、同じ昭和14年に設立された結核予防会も、研究所とその附属療養所を清瀬に設置することになり、土地の買収を開始した。

この間に**表1**に示したように、清瀬には次々と結核

療養所が建設されていった。

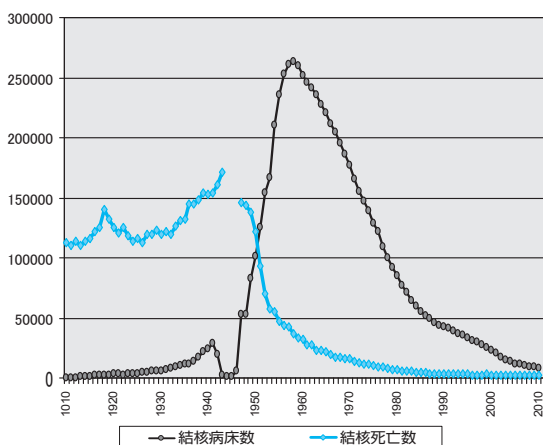
昭和20年代にさらに増加

敗戦後の混乱の中で、結核は強くまん延し続けていた。昭和19年に最初の抗結核薬であるストレプトマイシン（SM）が作られ、昭和21年にはパラアミノサリチル酸塩（パス、PAS）が結核菌に有効ということが明らかにされたが、敗戦国にその恩恵が及ぶのには、数年の遅れが必要であった。この間、昭和20年代早期に広く導入されたのが、胸腔に空気を注入して肺を虚脱させる人工気胸療法であったが、胸膜が癒着していると気胸はできなかった。

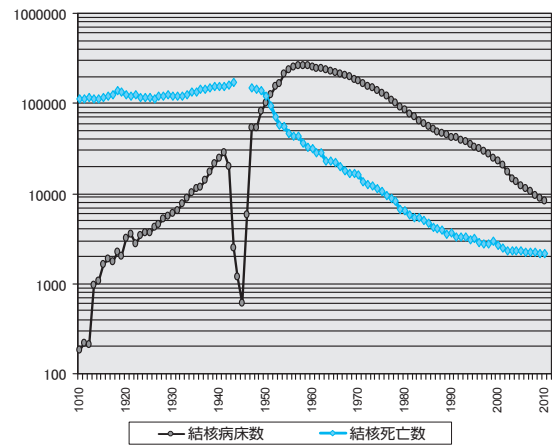
ペニシリンは国内で製造が可能になり、昭和23年以降は日常診療にも使えるようになったので、術後の化膿を恐れずに胸部手術ができるようになり、背部の肋骨を切除し、肺を虚脱させる胸郭成形術も昭和20年代前半から行われるようになり、療養所は自然療法の場から、積極的な治療の場へその性格を変えつつあった。病床の不足は深刻で、入所するまでかなりの待機期間があった。

国が昭和26年に結核予防法を制定し、本格的に結

図1 結核死亡数と結核病床数の推移



注：1) 1910-12は私立病床を含まない。 2) 1942-46は報告のあった府県のみ。総務省統計局のホームページ「病床の種類別病院病床数統計」5) から引用し作図



注：1) 1910-12は私立病床を含まない。 2) 1942-46は報告のあった府県のみ。総務省統計局のホームページ「病床の種類別病院病床数統計」5) から引用し作図

表1 清瀬にあった結核療養施設

	施設名	開設	
1	東京府立清瀬病院	昭和6年	戦時中に日本医療団、戦後国療となり、昭和37年東京療養所と統合。跡地は国立看護大学、看護協会研修所
2	ベトレヘムの園	昭和8年	
3	府立静和園	昭和8年	結核軽快者保養施設、後に同じ場所に都立小児結核保養所設置
4	東京市代用病院	昭和11年	昭和22年に同じ場所に都健保組合清瀬療養所設立
5	清瀬薫風園	昭和13年	
6	浴風園	昭和13年	日本鋼管の結核療養施設。昭和30年代に廃止され、昭和41年に労働省産業安全研究所設置
7	長生病院	昭和13年	昭和21年に海外引揚者寮となる
8	救世軍清心療養園	昭和14年	
9	清瀬保養園	昭和14年	沖電気、日本鋼管、日本鑄造の3社で設立。現在は竹丘病院。
10	傷痍軍人東京療養所	昭和14年	戦後国立療養所、昭和37年に清瀬病院と統合し、国立療養所東京病院となる。現在も結核病床あり。
11	上宮病院	昭和14年	
12	信愛病院	昭和16年	
13	清光園	昭和17年	昭和21年に海外引揚者寮
14	結核研究所	昭和19年	保生園から移転。附属療養所は昭和22年に開設。昭和33年に結研と附属療養所が独立組織となり、附療は平成元年に複十字病院と改称。現在も結核病床あり。
15	都健保清瀬療養所	昭和22年	代用病院の土地に建設、平成14年都立青山病院と統合し閉院。
16	都立小児結核保養所	昭和23年	静和園跡地に建設。平成22年に都立小児総合医療センターに統合し、閉院。
17	生光会清瀬療養所	昭和28年	清光園跡地に設立、平成3年に解散。明海大歯学部施設となったが、平成14年に廃止。現在空地。
18	織本病院	昭和29年	昭和44年に市内旭が丘へ移転

注：清瀬自然を守る会発行の機関誌「雑木林」第6号(1978・3刊行)に掲載された田中正大氏の論文「芝山のむかしといま」ならびに添付された年表と地図を参考にしながら作成した。

核対策に取り組み始めたときに、当時の結核による死亡数とほぼ同じ10万床の結核病床を25万床に増やすことが計画され、清瀬では昭和20年代に結核病院の新設、既設病院の増床が相継いで行われ、最盛時の昭和30年頃には、清瀬だけで15の病院に5千人の結核患者が入院し治療を受けていた。

清瀬の場合には、最初の府立清瀬病院の周辺に、人がほとんど住んでいなかった大きな雑木林の土地が残っており、そこに結核病床に対する需要が急増し、土地購入の交渉を行いやすいという条件が加わって、多くの療養所が集中して建てられたということになる。

その後の結核病床

図1に示したように、結核病床数は昭和31年には

25万床の目標を超え、33年には最高の263,235床に達し、空床が出始めてきた。昭和36年の命令入所制度の枠の拡大で一時空床数は低下したが、その後は結核まん延状況の改善と共に、空床が目立ち、昭和40年代後半からは結核病床の廃止や転換が盛んになった。

現在清瀬で結核病床が残っているのは東京病院と複十字病院だけで、この二つの病院も産婦人科、小児科を除いて、広く各科の診療を行う病院に変わり、表1でその後の変遷を記載していない病院は、高齢者を中心に診療を行う施設に変わってきている。

結核患者と清瀬

最盛期には5千人の患者が清瀬の療養所に入院していたということは、延べにすれば数十万人の結核患者

が清瀬で、治癒を願いながら、真剣に結核との戦いを展開していたことになる。当時の結核は若者に多かっただけに、結核と診断され、療養所に入院した衝撃は大きく、一方では死を見つめながら、治るための療養生活を送っていた。

その中には、東京病院に入退院を繰り返した俳人の石田波郷氏、清瀬病院で手術を受けて治癒した小説家の吉行淳之介氏などがある。

筆者も結核研究所附属療養所（現在の複十字病院）に3年近く入院した経験があるが、清瀬の施設で療養生活を経験した者にとっては、清瀬は一生忘れられない所である。

清瀬と結核病学

昭和20年代後半からは、ストレプトマイシンやパスも国内で製造できるようになり、SMの使用で術後最も厄介な結核性の化膿を防ぐことが可能になり、肺を肺葉から区域の単位で切除する肺切除術も積極的に行われるようになった。そこに、イソニコチン酸ヒドラジド（イソニアジド、INH）が結核に非常に有効なことが分かって、INH、SM、PASの3剤を併用する化学療法の研究が急速に進み、外科療法の全盛時代は昭和30年代の前半で終わり、化学療法でほとんどの結核が治る時代になった。

清瀬の最初の結核療養所である府立清瀬病院や傷痍軍人東京療養所は、敗戦後国立療養所清瀬病院、国立療養所東京病院となり、これに結核予防会の結核研究所と附属療養所が病床数も医師数も多い結核御三家ともいえる施設であり、東京都立の小児結核療養所という小児結核の専門施設も加えて、基礎から臨床、疫学、管理まで、日本の結核病学会をリードする多くの研究が清瀬の施設から産み出された。

結核は以前に比べれば激減したとはいえ、その解決までにはさらに地道な努力の積み重ねが必要である。基礎や疫学研究は現在でも結核研究所で続けられており、治療の困難な多剤耐性については、複十字病院が

近畿中央病院とともに高度医療施設に指定されており、東京病院もほぼ同等な機能を保持しており、日本の結核の研究や治療の中核施設が現在も清瀬に集中して存在している。

結核予防会結核研究所での研修活動

結核対策の実施を現場、第一線で担当している医師、保健師など技術者の知識と技能を高く保つことが、対策成功の基本である。結核研究所は創立以来、研究と共に、研修事業にも重点を置いて、活動を展開してきており、現在も続けている。研修履修者は、医師、保健師・看護師、診療放射線技師、衛生検査技師、結核行政担当者を含め、長期の研修が延べ5,309名、短期研修が延べ34,274名、併せて4万名弱に達している。日本国内の結核の予防や治療、行政を担当している職員にとって、清瀬は忘れられない思い出の地となっている。

昭和38年に開始された結核に関する英語で行う国際研修コースは、平成24年に50周年を迎え、記念式典が7月に行われた。この間に全世界の97カ国から延べ2,182名の研修生を受け入れ、研修修了者は世界の結核対策の第一線で活躍し、中には局長クラス、さらには大臣まで昇進した者もみられている。彼らと世界のどこかで会えると、懐かしそうに“RIT, Kiyose”と話しかけてくれる。

終わりに

清瀬は、ここで命をかけて療養した多くの結核患者にとって、日本国内の結核対策関係者にとって、さらには世界の結核対策従事者にとって、聖地、あるいは心の故郷として銘記されている。結核制圧への道りは遠い。清瀬と結核とのご縁は当分続くであろう。このご縁を大切にしたい。